



須藤 知弥さん  
Tomoya Sutou

〔上田〇区〕

長さ50mのハウスがずらりと並んでいる中には、元気に育つスイートコーンの苗がびっしり。4月ごろには収穫を迎えるそうで、甘くて子どもにも大好評な須藤さんのスイートコーン。天敵のタヌキに取られないように対策も頑張っているそうです。

## 大地にしっかり根を張り 次世代につながる農業へ

熊本県内の優れた農業経営者を表彰する県農業コンクール（県、熊本日日新聞社など主催）で昨年、上益城地域の新人王となった須藤知弥さん（40）。近年の地域農業の担い

手としての活動も評価され、本選では新人王部門の優良賞を受賞した。群馬県出身の須藤さんは、東京でシステムエンジニアとして10年間勤務。忙しい日々

を送る中で転職となったのは、就職で群馬へUターンしたことだった。通勤が電車から車に変わり、道沿いに広がる田畑の風景が目にも留まるようになったという。「週末に参加した農業体験がきっかけでした。オクラやピーマンの収穫を手伝って、土に触れている時間がとても心地よかったです」

将来を考えたとき、「このまま1丁の仕事が続けるのか、それとも農業に挑戦するのか」と自問。30代半ばを迎える前に心機一転し、農業へと進む道を決めた。

退職後は、日本各地の農家を住み込みで巡りながら農業を学ぶ旅へ。寒さが苦手だったこともあり、群馬、長野、愛媛などと次第に南の地域へと拠点を移していき、熊本にたどり着いたのは6年前だった。

熊本では有機農業に取り組むトマト農家のもとで研修を受けることに。その後、出会った妻の実家がある甲佐町へ拠点を移した。義父も町内で長年農業を営んでおり、お互いの畑について意見を交換し合いながらそれぞれの農業を追求。現在は米、麦、大豆、スイートコーンを中心に栽培している。

栽培で最も大切にしているのは「土づくり」。牛堆肥や微生物資材を活用し、作物が健やかに育つ環境を整えている。

今回受賞したことについて

伺うと、県知事や関係者が列席する格式ある表彰式に、「農業がこれほど誇りある仕事として認められていることを実感しました」と振り返る。須藤さんは昨年、JAかみましき青壮年部の部長に就任。部会の活動にも積極的に取り組んでいる。甲佐町内の小学校児童を対象に行われる田植えや稲刈り体験の支援活動もその一つ。「農業を身近に感じてもらうことはとても大事。こうした活動はこれからも続けていきたいですね」と笑みを見せる。

一方で、地域農業の高齢化と担い手不足は大きな課題。後継者がおらず、耕作をやめる農地を須藤さんが引き受けることも多くあるそうで、「経営規模は年々拡大している」と話す。

将来的には法人化も視野に入れながら、持続可能な形を模索している。異業種から飛び込んだ挑戦は今、甲佐の大地にしっかりと根を張り、次世代へとつながる農業へと歩みを進めている。